『ガエターノ・ドニゼッティ～ロマン派音楽家の生涯と作品』

<目次>

はじめに
序章　「ドニゼッティ研究家」グリエルモ・バルブラン
第１章　フクロウの飛翔
第２章　ボローニャ時代
第３章　困難な出発
第４章　ローマ、ナポリそしてミラノ
第５章　オペラ作曲家という哀れな職業
第６章　「ドッズィネッティ」対ドニゼッティ
第７章　個性の認識
第８章　『愛の妙薬』とドニゼッティの新しい喜劇のキャラクター
第９章　フェッラーラの宮廷で、バイロン、ゲーテ、ユゴーと共に
第１０章　ナポリの王立音楽院の教授とパリのイタリア歌劇場付き作曲家
第１１章　愛と死のドラマ『ルチーア』
第１２章　英雄的リリシズムと遊びの世界での小休止
第１３章　1837 年　この上ない悲しみの年
第１４章　1838 年　『ポリウート』の誕生とイタリアとの別れ
第１５章　オペラ、グランドペラ、オペラ・コミックの狭間で
第１６章　「優しい心」の時期に
第１７章　宮廷音楽楽士長としてモーツァルトのポストに
第１８章　人間の幻想についての最後のコメディ『ドン・パスクワーレ』
第１９章　ヴィーンとパリの間 多忙な生活の幕引き

『ガエターノ・ドニゼッティ～ロマン派音楽家の生涯と作品』からの抜粋により構成されています。
オペラ作品などタイトルは**「オリーブ色」**、訳者がより強く伝えたい箇所は**「オレンジ色」**、ホームページ掲載にあたって本書よりカットされた部分は**「濃い青色」**で**[・・・]**と表示されています。

第１４章

1838年

『ポリウート』の誕生とイタリアとの別れ

《この世は芝居であり、そこから物事を学ぶということは昔から知られていることです。ああ! イタリアでは許されない多くのさまざまな真実を、その芝居を通して見せることができるなら、キリスト教から離れることもなく、しかも良き家臣でありながら、もっとたくさんの事を学ぶことができるでしょうに。》 (義兄宛、1837年9月23日)

****

オペラ『ルーデンツ家のマリーア』がヴェネツィアの舞台で不成功に終った時には、あのアドルフ・ヌリ Adolphe Nourrit も立ち会っていた。彼はフランスの代表的なテノールで、〔ロッシーニの〕オペラ『グリエルモ・テル』で絶賛を浴びた初演の主役であり、また〔ボンポルティの〕オペラ『ユグノー教徒 *Ugonotti*』の初演のラウル役でもあるが、ちょうどその頃、パリの舞台に閃光のごとく現れた同僚のデュプレー G.L.Duprez に、王座を奪われたと感じていたのである。デュプレーは、**[・・・]**高い音を頭から出す〔ファルセットの〕古い歌い方を止めて、「胸声のド」によるロマン派的で男性的な歌い方の時代を切り開き、ヨーロッパ中の聴衆を熱狂で湧かせたのである。ヌリは、その細心の注意を払った完璧な発音、役者としての入念な細やかさ、劇中における役の性格づくりなどを通して名が知られるようになり、また1830年の７月、パリのバリケード(1)の上で、〔フランス国歌〕『ラ・マルセイエーズ』を歌って自らを鼓舞し、精力的な愛国主義者としても有名になった人物である。だから、ヌリは人々の尊敬や敬愛に囲まれていたのだが、彼自身は、新しい時代と新しいオペラのスタイルに置いて行かれたと感じていたのだった。何年もの間、パリの王立音楽アカデミー〔オペラ座〕 Académie Royale de Musique はヌリの独壇場だったが、今やその舞台で旋風を巻き起こしていたデュプレーに対し、**[・・・]**対決したりライバル意識に耐えていく気もなかった。まだ35歳にもならない彼がオペラ座から退く決心をしたことを伝えながら、1836年10月26日、友人のフェルディナント・ヒラー Ferdinand Hiller にこう書いている。《私は、格闘技の選手ではありません》と。

これまでオペラの舞台を踏んだ人の中でもっとも気品のある人物の一人であり、繊細な精神の持ち主で、しばしば危機に陥ってしまうほど芸術上の悩みに煩悶していたヌリは、結局、デュプレーがあの革命的な「胸声のド」を「発見」した地、イタリアを目指したのである。**[・・・]**教鞭を取っていたパリの音楽院の許可を得て、ヌリは念願だった南へと旅立った。ミラノで自分の歌をロッシーニに聞いてもらい、友人のヒラーに会い、そしてヒラーと一緒にヴェネツィアへ向かった。彼は自分の師となる人物を探していた。1838年１月30日の夜、フェニーチェ

劇場でオペラ『ルーデンツ家のマリーア』の不成功に立ち会ったその時、ドニゼッティを知ったのである。

その出逢いに、ヌリがすぐに動かされたとは言えない。むしろ、その逆である。**[・・・]**オペラ『ルーデンツ』に関しては、彼は情け容赦なく、こう書いている。《ドニゼッティのオペラは、一つ二つ聞けば、全て知ったも同然ですし、それに一部を聞いただけで、そのオペラの残りの展開がすぐに分かってしまいます》と。また、聴衆の反応についての評価は、明確である。《音楽関係の人たちはあまり満足していないようですし、それに聴衆も口笛を鳴らしています。》ということで、さんざんな結果でブーイングまでされたドニゼッティではあるが、ともかく、ヌリの関心をひいたのであった。**[・・・]**

２人の友情――ヴェネツィアで生まれ、ヌリの自殺で悲劇的にも終結を迎えることになるのだが、ナポリでの互いの交流で熟したこの友情関係――の成り行きを追ってみよう。《５月30日にオペラが初演されるので、すぐにもナポリに戻らなければなりません》と、ドニゼッティは１月21日、『ルーデンツ家のマリーア』の稽古をしていたヴェネツィアから、ドルチに宛てて書いている。あまり時間がなかったので、ドニゼッティはヌリと一緒に、２月３日の土曜日、真夜中にヴェネツィアを出発し、フェッラーラとボローニャを通って、２月６日、フィレンツェに着いた。ここでドニゼッティは、何日間か昔の友人や知り合いと会った後、**[・・・]**一人でリヴォルノに向けて出発した。ふたたびリヴォルノで落ち合った２人は、２月15日、「エトルスコ」という船でチヴィタヴェッキアへと発った。彼らの友情は**[・・・]**旅とともに次第に親密になっていった。**[・・・]**数日後、ドニゼッティはローマの遺跡に夢中になっているその友人のテノールを残して、２月22日前後にナポリに着き、そしてヌリは、３月３日、ドニゼッティに追いついた。

[・・・]一方には、キャリアや名誉の頂点に立ち、ヨーロッパ中に知れわたっていたにもかかわらず、勉強し直し、ドニゼッティの教えを通して新しい技法を得ようと、全てを投げ出したテノールがいる。**[・・・]**そしてもう一方には、３ヵ月後に予定されているサン・カルロ劇場の公演のために、全く新しいオペラを作曲したいと思っている、現役の、イタリアでもっとも偉大で名の知れたオペラ作曲家がいる。**[・・・]**

[・・・]３月６日、ヌリは**[・・・]**妻に打ち明けている。《**[・・・]**私の栄光の過去、私の教授の立場、私のフランスでの第一歌手としての地位を忘れます。私のキャリアが始まります》と。ヌリは、ドニゼッティのどんな僅かな空いている時間でも最大限に利用できるようにと、《ド

ニゼッティのところから少ししか離れていない》アパートを借りたのである。そして《**[・・・]**ドニゼッティはボルドーニ G.M.Bordogni の歌の稽古に私を連れて行ってくれました。[…]私はａｂｃに戻りました》。**[・・・]**

一方ドニゼッティは、この並外れた変わった生徒**[・・・]**ヌリに、バルバイアとの好条件の契約、つまりその秋と次のカーニヴァルのシーズンのためのドニゼッティの新作オペラを演じられるという特権付きの契約にサインをさせることで、ヌリがナポリにいられるようにしたのである。４月28日、ヌリは契約書に署名し、翌日、そのことを妻に、喜びを隠し切れない感じでこのように書いている。《私は、ドニゼッティがわざわざ私のために作曲してくれたオペラでデビューします。その作品の題材は私自身が選びました。〔イタリアでデビューするという〕このようなことは、フランスを離れる時に、まさに私が夢見ていたことです。そのオペラはコルネイユの『**ポリュークト *Polyeucte*** 』で、私はその中に、音楽にするのに相応しいドラマのシチュエーションを見つけたのです。［…］この題材は、イタリアにとって全く新しいということもあって、ドニゼッティに印象づけました。［…］〔シーンに現れる〕キリスト教徒がドニゼッティを煽り立てたのです。また彼は、涙を誘う場面の中に宗教的な歌を入れたら効果があると考えています。［…］私たちは、宗教心が勝利する前に、人間の感情の方が高まっていくようにしました。そうすれば、最終的に犠牲がもっと美しく見えるからです**[・・・]**》。

翌月の５月５日、ヒラーに送った手紙の中で、ヌリはまたも、**[・・・]**次のように記している。《私はバルバイアと６ヵ月の契約を結びました。［…］ドニゼッティは［…］何か新しいことをする必要性を感じていて、**[・・・]**彼がいまもっとも意欲的に狙っているのは、パリにたどり着くことと、オペラ座に到達するということなのです。**[・・・]**

[・・・]ヌリは自信を取り戻し、**[・・・]**ふたたびトップの座に立てることを考えと、幸福の絶頂にいる感じがした。ドニゼッティは、ヌリのそばでフランス風のスタイルの勉強をすることによって、**[・・・]**マンネリな題材からようやく逃げ出せることができると思っていた。**[・・・]**バルバイアは、期待できるドニゼッティの新作と、その時はまだサン・カルロ劇場の聴衆に知られていなかった有名なヌリを舞台に立たせることで、莫大な収入が得られることを、もう楽しみにしていたのである。**[・・・]**

ところが**[・・・]**ドニゼッティは、６月頃から義兄にこのように打ち明けていた。《知ってるかい。今、『ポリウート』が禁止されるかも知れないということを。**[・・・]**》《『ポリウート』はもうほとんどダメです。検閲は神聖すぎると言って、渋い顔をしています。》**[・・・]**

何度も二転三転を繰り返した後、ドニゼッティ・ヌリ・カンマラーノの３人コンビが、キリスト教徒たちを、「グエブリ〔ガバール Gabar 〕」と言われていたゾロアスター教のインド人の信者に置き変え、そしてリブレットのタイトルを『イ・グエブリ Ｉ Guebri』と変えることで、オペラを救おうと努力したにもかかわらず、８月12日、『ポリウート』の上演禁止令が最終的に出された。**[・・・]**検閲者ロワイエ Royer は、**[・・・]**『ポリウート』のような神聖なテーマを扱った題材は、サン・カルロ劇場では四旬節の時期くらいならまあ許せるのだが、秋のシーズンのためには許すことはできない、という決断を下したのである。

[・・・]この不運な歌い手には、オペラ『トロメイ家のピーア』のナポリでの再演で何とかその場をしのぐように提案した。**[・・・]**『ピーア』の主役の感情的な誇張や開放的で広がりのある歌に対して、『ポリウート』の際立つ場面に合わせてドニゼッティが入念に練り上げきめ細かく磨き上げたヌリの声は、発声の急激な変更による困難から、彼の欠点がよりいっそう際立って曝け出されてしまうまでに負けてしまったのである。**[・・・]**10月の初め、ドニゼッティはパリに向かって最終的にイタリアを後にした**[・・・]**。ヌリは時々、神経的な興奮に襲われると、自分自身を納得させようと努力していた。《おかしいのは私の頭だけで、私の声はパーフェクトなのです》（10月16日）。声のことに関しては、ヌリはドニゼッティにとても感謝していた。《**[・・・]**彼のお陰で声の質もよくなったのだし、フレーズの取り方にも、より幅のある広がりが持てるようになったのですから》（10月25日）。11月、ヌリはメルカダンテの**オペラ『誓い *Il giuramento* 』**でサン・カルロ劇場に登場し、そして彼の声は、**[・・・]**昔の声の特色を回復しつつあったと、ヌリ自身が書くほどの大成功を収めたのである。しかし彼は、ガエターノの精神的な支えもなくなった中で、決して楽な相手ではないバルバイアの手に操られていた。フランスからやって来た、７人目の子供を身ごもっていた妻が側にいることで、ヌリの心の支えとなってはいた。とはいえ、自分の精神や好みに反するオペラに出演することの強制、そして禁じられた『ポリウート』への、凝り固まり、かつしがらみのように拭い切れない哀惜の思いによって、彼の神経的発作はますます回数が増えていったのだった。３月７日、イタリアに来たことは自分の間違いであった**[・・・]**とナポリの友人グリエルモ・コットローに打ち明けた後、あまり気乗りしなかったその日の夜のサン・カルロ劇場での慈善演奏会に参加するようにと説得された。そしてこれは、旋風を巻き起こすほどの大成功となった。しかし翌日の早朝、ヌリはバルバイア・ホテルの最上階から身を投げ**[・・・]**たのである。ドニゼッティは、自分にインスピレーションを与えてくれた**[・・・]**ヌリに、パリのセント・ロク教会で頭を下げたの

だった[5]。

その悲劇が起きた時、ドニゼッティはすでにイタリアを去っていた。[・・・]いつもは、彼のオペラが上演される時は、その場所その場所に行き、そうしてその後は、弾んだ心でナポリの家に帰っていた。ところが、今回はイタリアとの本当の別れだった。それ以降は、ナポリのナルドネス通りの自分のアパートをいつでも使えるように管理させ、使用人の月給を支払い続けていたのであるが、ドニゼッティがその家に帰ったのは、1842年８月と1844年の何週間か[・・・]だけであった。[・・・]あまりに馬鹿げた『ポリウート』の上演禁止令や、[・・・]ほかに２つの問題があった。一つはナポリの王立音楽院の学長ポストに関する大きな問題であり、もう一つは、夢に見ていたミラノの国立音楽院の学長の問題であった。

[・・・]学長のニコラ・ズィンガレッリが亡くなった時、ドニゼッティは《音楽院の音楽指導に関する管理・運営を受け持つことになったにもかかわらず、もっとも優秀な若者らへの毎日の授業をやめなかった》。またドニゼッティが、すでに就いていたオペラ作曲家と王立劇場の監督という重い役職に、この新しい責務を加えたいと思ったということは、[・・・]よほどこの学長のポストを重視していたということである。しかし[・・・]《もしも陛下が王立音楽院の学長のポストを私に下さらなければ、私は辞めます》（スパダーロ宛、８月９日）。《王立音楽院でも、私が学長のポストに就くことに反対している人がいるようです》（同スパダーロ宛、８月26日）。決断がなされないままにまたも１年が経ち、そして翌年の1838年[・・・]５月26日、ドルチにはこのように打ち明けている。《数日後、残っても何の得も得られないこの音楽院に辞表を提出します》。[・・・]

今回は、[・・・]手短かに言えば、音楽院の学長のポストのために、メルカダンテという有力な候補者が現れたということである。そこで、ドニゼッティかメルカダンテかという二者選択に対し[・・・]メルカダンテが《ナポリ人であるということだけ》で、そのポストを彼に与えなければならないのだと述べたのである。[・・・]ドニゼッティにとっては、[・・・]王の拒否に対する苦い思いは、彼の中に永遠に残ったのである。

[・・・]それに対してミラノの音楽院の学長のポストが与えられなかったガエターノの失望、いやむしろ苦しみについては、[・・・]1838年５月５日のメルツィ伯爵に宛てた手紙で[・・・]このように書いていた。《ミラノの音楽院に関しては、[・・・]向こうから呼ばれたのなら別でした。[・・・]カンタータの作曲者に他の人が選ばれたということから考えると、[・・・]良い作曲家と思われていなかったということがよく分かりました。[・・・]とくに、[・・・]

〔ミラノの音楽院の学長のポストに就けなかった〕[・・・]ほうが私にはこたえました。でも、[　・]それは生活のためではありませんでした。[・・・]ただ自尊心だけの問題なのです。[・・・]》[　・]このミラノでの出来事は、これととてもよく似ているナポリの出来事と同時に起こったようである。しかし、このミラノの出来事に関しては、ドニゼッティの誤解によるもので、実際には彼が言っているような問題は存在しなかったのである。(10)[・・・]

[　・]ドニゼッティは、[・・・]実際のところ[・・・]、1838年の最初の２、３ヵ月から、パリのことをすでに真剣に考えていた。つまりその頃から彼は、ヌリが近くにいたお陰で、フランス語の正しい「イントネーション」が勉強できただけでなく、フランス風オペラの形式の構成や音楽のフレーズの繋ぎ、そしてドラマの論理性なども吸収しようとしていたのである。[・・・]

パリ行きの機は、王立音楽アカデミー（すなわちオペラ座）の総監督であったシャルル・デュポンシェル Charles Duponchel[・・・]によって早くも熟した。[・・・]５月の12日、ドニゼッティがパリにいるテノールのデュプレーに宛てた手紙で、[・・・]すでにドニゼッティがオペラ座としっかりとした繋がりを持っており、その証拠にフランスのもっとも有名な劇作家で、また脚本家でもあったウージェーヌ・スクリーブ Eugène Scribe が音楽を付けるために自分の作品をドニゼッティに送っていたほどだったということを明らかにしている。[・・・]《私のとても親しい友人を通して、スクリーブ氏がすでに『ジュリアーノ伯爵 Conte Giuliano』を送ってくれたということは聞いています。でも私は、[・・・]他の作曲家たちが皆やっているように……、５幕もののオペラで聴衆を飽きさせたいのです。[・・・]短くても構わないのですが、ともかく５幕欲しいのです。[・・・]》

[・・・]いつもの簡潔さや、アクションの動機としての愛のテーマ、ドニゼッティがいつも詩人に求めていた感動させるエピソードのほかに、今度は《イタリアで何千回も使った日常的なもの》から脱け出たシチュエーションも、ドニゼッティは強く求めていたのである。ヌリとの接触、彼の助言、後押しは、まさに肥沃な土地に蒔かれた種であった。[・・・]ヌリは大きな基点であり、音楽上の助言者ではあったが、ドニゼッティにとって「自分の」テノールは、デュプレーだった[・・・]。彼のオペラを演じる他の歌い手たちに対してはむしろ、ヌリに対するものよりももっと厳しい要求をドニゼッティは出していた。[・・・]つまり、ドニゼッティの中に今までになく自分自身の価値・能力に対する認識がはっきりした形をとってきつつあり、そして芸術家ドニゼッティの中に、名誉という感情が大きな座を占めるようになるのである。ナポリの音楽院の学長のポストを受けたいと思ったのは、ただ名誉のためだけだったのだし、

パリでもまた、〔４月10日の手紙から〕数週間後の６月１日、《名誉が欲しい》と、義兄に宛てて書いている。さらに[・・・]これから作曲するオペラは、自分の《考え方》に相応しいものでなければならないと、ドニゼッティは強く主張していたのである。

パリにおいて、しかも当時は、ヨーロッパの最頂点にあった劇場のために、１本ではなく２本ものオペラを作曲するようにとドニゼッティに依頼したデュポンシェルとの交渉でも、ドニゼッティは[・・・]自信を見せていた。[・・・]《フランスでの私のデビューは、私が今までイタリアで上演したのに匹敵するレベルのものでなくてはなりません》と、彼は1838年５月25日、オペラ座の総監督に宛てた手紙で、このように揺るぎない態度で書いている。[・・・]オペラ座に提出したドニゼッティの条件も、[・・・]２つのオペラのリブレットに関しては彼が一存で決める、配役はトップ・クラスの歌い手、上演日ははっきりと決める、そして最後に、最初のオペラの初演には、何と３ヵ月の稽古を要求する、というものであった。

パリでの合意に関する交渉は、あの《無駄口をたたいてばかりいる》アックルスィ　M. Accursi(13)に依頼したので、ことが長々と延びていた。いつものごとく、ドニゼッティはイライラしていた。[・・・]《４ヵ月も手紙をやりとりした今でも、まだ、契約が取れるのか取れないのか、自分のことがどうなるのか分からないのです。パリで事をいい加減にしている》、アックルスィのせいである。こうして10月[・・・]、ナポリを発つという結論に至った。[・・・]

[・・・]８日に、ヌリがオペラ座のオーケストラの指揮者であったフランソワ・A.アベネック François A. Habeneck 宛ての紹介状を、ドニゼッティに手渡している[・・・]。その紹介状でヌリは、《デュポンシェルが、ドニゼッティに示した提案》を取り上げ、《[・・・]もしもオペラ座でいいデビューができるなら､おそらく永遠にフランスに根をおろすのではないかと私は思います》と強調していた。さらに、《お願いですから、アベネック先生が全面的にドニゼッティをサポートして下さるように》と頼んでいた。何故なら、《いいデビューを》得るためには、《貴方は、われわれの劇場が不可欠に必要としている条件をよくご存知でいらっしゃるし、もしもデュポンシェルだけに任せたら、どうなってしまうかは神様のみぞ知る、です》。[・・・]と[・・・]加えていた。[・・・]

10月９日、ドニゼッティは、「レオポルドⅡ世号」に乗船し、12日にジェノヴァに着き、13日にマルセイユで下船した。ここに５日間泊まった後、[・・・]21日にパリにたどり着いた。たった一個のトランクと、一つの旅行カバンだけで、ルヴォワ通り Rue Louvois の５番地に居を構えた。同じ建て物にアドルフ・アダン Adolphe Adam も住んでおり、彼とは後ほど、

いい友人関係を結んだのである。イタリアへの別れと、新しく、しかし困難なパリ時代の始まりであった。

原注

（１）1830年７月26日、パリのオペラ座での『グリエルモ・テル』の稽古の**[・・・]**最中、有名な陰謀の三重唱にさしかかった時、《「独立か死か！」とグリエルモ〔ウィリアムの役〕が叫ぶと、劇場中に戦慄が走った。［…］稽古はそこで終わってしまった。［…］その後、11日間、劇場は沈黙に包まれた。**[・・・]**ヌリはバリケードの上で『ラ・マルセイエーズ』を歌うのである。国家の軍隊の敬意をうけつつ、彼は刀に手を置きながら、中隊の先頭に立って行進した》。**[・・・]** 本文に戻る

（５）ヌリの死は、ナポリに深い精神的打撃を与えた。ナポリでは、荘厳な葬儀が行われ、またマドンナ・デル・ピアント Madonna del Pianto 教会の墓地には記念碑が立てられた。４月には、遺体がパリに移された。いったんマルセイユで留まり、そこで鎮魂ミサが行われ、偶然にもマルセイユにいたショパンが、ヌリが華麗に歌っていたシューベルトの『惑星 Gli astri』という曲をオルガンで弾いた。パリでの葬儀にドニゼッティが参列したということは、1839年５月10日の、ヌリの舅のヂュヴェルジェー Duverger に宛てた手紙から確認できる。《聖ロック教会に行くのは明日です！ わが良き友よ、その訳はご存じでしょう。［…］彼のお気の毒な家族の前に顔を出す勇気もないのですが》。**[・・・]**聖ロック教会の鎮魂ミサの際には、ケルビーニ L. Cherubini の『レクイエム』が演奏された。ヌリの妻は、７人目の子供を出産した後、この哀れな歌手の悲劇的な結末の５ヵ月後に命を落とした。**[・・・]** 本文に戻る

（10）**[・・・]**1837年８月、10年ものあいだ、帝国・王立音楽院の学長を勤めていたフランチェスコ・バズィリ Francesco Basily は、サン・ピエートロ寺院の楽士長になるために、ローマへ移ることが許可された。学長のポストには、臨時として副学長のニコラ・ヴァッカイ Nicola Vaccaj が任命された。ニコラ・ヴァッカイは、『ジュリエッタとロメオ Giulietta e Romeo』というオペラを書いたことでその当時有名だった作曲家であり、翌1838年２月、学長になるための選考試験に合格したのである。（ドニゼッティはその選考試験に参加しなかった。）**[・・・]**

1838年９月、オーストリア皇帝フェルディナントⅠ世がミラノを訪れ、大聖堂においてロンバルディア王になるための鉄の冠を受ける戴冠式に臨む。ドニゼッティが言っているカンタータというのは、その式典の際に書くことになっていたカンタータのことであり、結局それは、ブレーシャ出身のニコリーニ Nicolini の詩にヴァッ

カイが作曲した『ロンバルディア民衆の王への慶祝 I voti de' Popoli Longobardi al Sire』という曲のことである。1836年からすでに準備が進んでいた歓迎式典では、音楽院の学生たちによる演奏会が予定されており、それは国歌から始まり、学長によって作曲された合唱交響曲、すなわち先のヴァッカイのカンタータで終わるというものであった。**[・・・]**となると、**[・・・]**ドニゼッティの愚痴の根拠はなかったというべきである。なぜなら、式典の責任者が最初からこのようなことを音楽院の人たちに頼んでいたからである。**[・・・]** 本文に戻る

（13）ミケーレ・アックルスィ Michele Accursi は、「青年イタリア」(訳3) に属していた炭焼き党員で、常にマッツィーニの信頼を得ていた。1832年11月に逮捕され、サンタンジェロ城に幽閉されていた。1833年３月、決して公平無私とは言い難い法王グレゴーリオ〔グレゴリウス〕XVI世の口添えによって釈放された。その後、世間的にはマッツィーニ党の亡命者という名目で、パリに行った。しかし**[・・・]**『イタリアの復興運動』（Il Risorgimento italiano, Milano, 1923-28）という出版物で、ヴァチカン市国に保管されている資料**[・・・]**によるとアックルスィは、法王国の警察の回し者であり、釈放と引き換えに、パリに亡命していたイタリアの愛国主義者の動きに関する定期的で詳細な報告を、パリから送っていたのである。いわば二股膏薬の英雄で、ローマ共和国時代に、無邪気にも彼に警視総監のポストを与えたマッツィーニの信頼をふたたび獲得することができるほど、狡智にたけた人間であった。

おそらくローマでアックルスィと知り合ったドニゼッティは、パリに行った最初の頃からすでに彼に頼っていた。ドニゼッティ自身が書いているように、アックルスィはドニゼッティの《影》のような存在であったのだ。現に、ドニゼッティはいろいろな交渉において、《ほとんど全権》をアックルスィに与えていた。**[・・・]**オペラ座との契約に関して、1838年２月24日、ナポリからの手紙でドニゼッティ自身が、後ほどデュポンシェルにも提案する条件をアックルスィに示している。**[・・・]**その後、アックルスィは、（自分の本来の活動を隠すためのいい盾として）ドニゼッティの事実上の秘書となった。それは、ちょうどドニゼッティが大きな契約をしたり莫大な収入を得る時期で、おかげでアックルスィは、かなりの額の、しかも必ずしも正当でないコミッションを確実に得ることができるようになったのである。本文に戻る

訳注

（訳３）「ジョーヴィネ・イタリア Giovine Italia」〔青年イタリア〕は、1831年、マルセイユでマッツィーニによって結成された政治的秘密結社であり、その目的は、民主主義的共和制を設立することであった。1834年、強制的に解散させられるが、1843年から47年にかけてふたたび復活した。本文に戻る